様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２９８８

研究課題名（和文）BC級戦犯裁判の事例に基づく戦時言語政策および戦争犯罪と通訳に関するマクロ的研究

研究課題名（英文）A study on interpreters and interpreting in wartime language policy and war crimes, drawing on class B/C war crimes trials against the Japanese

研究代表者
武田　珂代子（TAKEDA, Kayoko）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：６０６２５８０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：「戦争と言語」を主題とする本研究は、主に、英軍による対日BC級戦犯裁判で、被告人となった戦時通訳者と戦争犯罪の目撃者として証言した戦時通訳者に焦点を当てた。歴史的・地政学的なコンテクストや戦時通訳者の役割に注意を向けながら、通訳者の可視性、戦争犯罪に「関与する」リスクについて、訳出内容の「遂行性」、通訳者の「幻想主体性」、拷問などの犯罪に関わる通訳者の共同責任に焦点を当てて考察した。また、米国、英国、豪州、カナダによる戦時日本語言語官の動員や訓練、および日本軍による台湾人や占領地住民の通訳者としての動員についても研究した。研究成果は書籍や講演を通じて国内外で多様な学問分野の研究者に発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦時通訳者が戦犯として有罪判決を受ける、また、戦争犯罪の目撃者として法廷で証言を行う、という特異な事例に注目し、その背景と裁判内容を提示し、現代の戦争・紛争で通訳者が直面する課題と関連づけて論じたことは、新奇性という意味で学術的意義があるだけでなく、社会的意義があると考える。特に、本研究が提示した戦時通訳者の可視性、違法行為への関与リスク、訳出内容の「遂行性」、所属部隊の行動に対する共同責任などの課題は、従来から唱えられてきた通訳者の「黒子的」役割、中立性、守秘義務といった考えに一石を投じるものである。さらに、戦時言語官の養成に関する研究は、安全保障や諜報における現代的課題にも通じると考える。

研究成果の概要（英文）：This study concerned issues of languages in war. It mainly examined wartime interpreters as defendants and eyewitnesses of war crimes at post-Asia-Pacific-War British military trials against the Japanese. By paying attention to the historical and geopolitical contexts and the role of interpreters in violent conflict, it discussed the issues of interpreters' visibility and risk of being "concerned in" war crimes, focusing on the "performativity" of what they interpreted, their "illusory agency" and joint responsibility in taking part as interpreters in unlawful acts such as torture. This study also discussed how the US, Britain, Australia and Canada recruited and trained wartime Japanese linguists as well as how the Japanese military recruited Taiwanese and local civilians in Japanese-occupied territories as interpreters. The findings of this study were presented through publications and lectures in international settings, reaching audiences in diverse academic disciplines.

研究分野：翻訳通訳研究

キーワード：戦時通訳者　BC級戦犯裁判　被告人としての通訳者　証人としての通訳者　通訳者の共同責任　通訳者の可視性　通訳内容の遂行性　アジア・太平洋戦争

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景として、まず、翻訳通訳学の領域における先行研究、次に、研究代表者による過去の研究とのつながり、さらに、今日の国際紛争における言語的課題という点から述べる。

(1)　翻訳通訳学の領域で本研究に関連する研究としては、ニュルンベルク裁判、東京裁判、旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷における通訳・翻訳の状況と問題を扱ったものがあった。また、アフガニスタン・イラク戦争の従軍通訳者への関心の高まりを背景に、軍事言語要員（military linguists)の現状に関する研究も行われるようになった。しかし、いずれも記述的な研究が多く、歴史的コンテクストや国際関係などマクロ的視点からの分析を加えたものはほとんどなかった。「戦争と言語」に関する包括的な研究には、歴史・政治・社会的コンテクストを加味した厚みのある研究が必要だと認識した。

(2)　研究代表者は東京裁判やニュルンベルク裁判の通訳に関する研究を経て、アジア・太平洋戦争後の対日 BC 級戦犯裁判に関わった通訳者に研究対象を広げていたが、その中で、戦時通訳者が被告人となり有罪判決を受ける、あるいは戦争犯罪の目撃者として法廷で証言する事例があったことに注目した。これは世界の通訳史においても特異なことであり、なぜそのような事態が生じたかを追求する必要性を感じた。特に、通訳者の役割に関する従来からの議論を再考し、戦争や紛争における通訳者の役割や責任について新たな視点を模索することに関心を持った。

(3)　戦時通訳者が通訳行為に従事する中で、戦争法規に違反する行為に関与する可能性は今日でもありうる。「対テロ戦争」で米 CIA が「強度の尋問」と称して拷問を行なっていたことなどを鑑みると、「拷問を通訳することは戦争犯罪になるのか」といった問いかけや戦時通訳者の職務倫理や責任などの問題は、国際紛争や安全保障にとって重要な関連性を持つ今日的課題でもある。こうした課題の議論に通じるような「戦争と言語」の研究が必要だと感じた。

２．研究の目的

本研究では、主に、アジア・太平洋戦争後の連合国による対日 BC 級戦犯裁判の事例に基づき、「戦争と言語」に関する包括的な研究を行い、現代的な課題に関連性のある情報と議論を提供することを目的とした。特に、歴史学者や法学者と国際的連携をとり、マクロ的、多角的な視点を取り入れて、通訳研究を超えた幅広い分野の人々に研究成果を発信することを目指した。具体的には以下の課題に取り組んだ。

(1)　戦時通訳者の「可視性」や「リスク」の見極め

英軍による対日 BC 級戦犯裁判において戦時通訳者が被告人となり有罪判決を受けた事例、また、戦時通訳者が戦争犯罪の目撃者として裁判中に証言をした事例に注目し、裁判記録などの一次資料および関連する二次資料の精査に基づき、戦時通訳者の「可視性」「信用」「リスク」などの課題について検討することで、戦争や紛争というコンテクストにおける通訳者の役割の特徴を見極める。特に、従来から受け入れられてきた通訳者の「中立性」や「守秘義務」などの言説に対して新たな視点を投げかけることを目指した。

(2)　戦争犯罪における通訳者の共同責任

裁判記録などの一次資料および関連する二次資料をもとに、英軍による対日 BC 級戦犯裁判において戦時通訳者が被告人となり有罪判決を受けた事例の詳細を分析し、戦争犯罪における通訳者の共同責任について検討すること。特に、関連する国際刑事法や戦犯裁判の判例を参照しながら「上官命令」による抗弁に関する議論を整理し、また、訳出内容の「遂行性 (performativity)」や聞き手が抱く通訳者の「幻想主体性 (illusory agency)」について検討することを目指した。

(3)　戦時言語官の養成や植民地・占領地言語政策

連合国による対日 BC 級戦犯裁判では、通訳者が法廷通訳人、被告人、証人として関わった。また、裁判関連の書類の翻訳をする言語官もいた。そうした通訳者・翻訳者がどのように動員・養成されたのか、米国・英国・豪州・カナダを事例にして調査研究するとともに、日本軍の通訳者として動員された台湾人や日本軍占領地の地元住民に注目し、植民地や占領地における日本語教育についても検討する。これらの調査や検討を通して、現代の安全保障や諜報に関する活動に必要な言語官の動員や養成に関する議論にも通じる情報と考察が提供できることを目指した。

３．研究の方法

本研究では、まず、対日 BC 級戦犯裁判の裁判記録や関係資料、また、連合軍による日本語言語官養成プログラムに関する資料の収集と整理を行い、関連する二次資料を参照しながら、課題の整理を行った。見極めた課題の分析にあたっては、研究協力者である歴史家や国際法学者との討議、また、学会発表や招待講演、論文・著書の刊行を通して得た本研究に対するフィードバックを参考にした。特に、英軍による裁判に焦点を当てたのは、対日戦犯裁判を実施した連合国の

中で、最も多くの通訳者(38 名)に有罪判決を下したこと、また、裁判記録が入手可能であることが理由である。連合国による戦時日本語言語官の養成に関しては、研究代表者の言語能力および資料の入手可能性という理由で、米国、英国、豪州、カナダに焦点を当てた。具体的には以下のような研究活動を行った。

(1) 公文書館などでの資料収集と整理、課題の見極めと分析

英軍による対日 BC 級戦犯裁判関連の一次資料については、英国公文書館、大英図書館、帝国戦争博物館などで収集した。連合国による日本語言語官養成に関する一次資料は、スタンフォード大学フーヴァー研究所、米・国防語学学校外国語センター・アーカイブス、英国公文書館、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院、ケンブリッジ大学、豪州公文書館、カナダ・日系博物館などで収集した。また、関連する二次資料も、アジア・太平洋戦争、戦犯裁判全般、国際刑事法、日本の植民地・占領地における日本語教育政策、戦中の日系米人・カナダ人に関するものなど、多岐にわたって検討した。その中で、戦時通訳者のおかれた特殊な状況、役割と責任、戦争や諜報に関する言語政策といった研究課題の絞り込みを行い、歴史・政治・社会的コンテクストを強く意識した分析を行った。

(2) 研究協力者との討議

上記のような課題の見極めの過程および分析においては、研究協力者から専門的知見の提供を受け、討議を重ねた。戸谷由麻氏（ハワイ大学）からは戦犯裁判全般、Barak Kushner 氏（ケンブリッジ大学）からは「日本帝国」崩壊後のアジア情勢全般、Beatrice Trefalt 氏（モナシュ大学）からはフランスによる対日戦犯裁判や戦後の引揚問題、Shichi Mike Lan 氏（台湾国立政治大学）からは戦犯となった台湾人通訳者、Cheah Wui Ling 氏（シンガポール大学）からは国際刑事法に関する知見の提供を得た。特に、Shichi Mike Lan 氏とは定期的に討議を重ね、台湾人通訳者の言語的背景や動員の過程などについて理解を深めた。

(3) 学会発表、講演、刊行物に対するフィードバックの検討

学会発表、招待公演、書籍の刊行を通して、研究協力者だけでなく、さまざまな分野の研究者から、本研究に対するフィードバックを受け、それを参考にしながら、研究課題の分析を続けた。特に、東アジア研究、歴史研究、メモリースタディーズ、社会人類学、軍事研究などの専門家から得た反応を参考にしながら、事例分析を進めた。

４．研究成果

(1) 戦犯としての通訳者、戦争犯罪の目撃者としての通訳者

主に、英軍による対日 BC 級戦犯裁判において戦時通訳者が被告人となり有罪判決を受けた事例、また、戦時通訳者が戦争犯罪の目撃者として検察側のために証言をした事例について、裁判記録などの一次資料および関連する二次資料を精査した。その結果、被告人となった戦時通訳者が二言語・多言語話者になった背景（日本の植民地・占領地における言語政策、移民や経済活動による人の移動など）、動員された理由（日本軍の南進、反日勢力の鎮圧、連合軍捕虜の収容所の運営など）、裁判における罪状、抗弁、判決などを歴史・政治・社会的コンテストに照らしながら詳細に提示した。特に、「上官命令」や「通訳しただけ」という抗弁が英軍裁判では受け入れられなかった点を、国際刑事法や戦犯裁判の判例を参照しながら論じた。こうした検討から浮かび上がった戦時通訳者の「可視性」「リスク」「戦争犯罪における共同責任」といった課題について、訳出内容の「遂行性」や聞き手が抱く通訳者の「幻想主体性」の視点から考察し、戦争や紛争というコンテクストにおける通訳者の役割の特徴を考察した。結果として、従来から受け入れられてきた通訳者の「中立性」や「守秘義務」などの視点が、戦争や紛争というコンテクストでは必ずしも適用できないことを示した。

(2) 米国、英国、豪州、カナダにおける戦時日本語言語官養成の比較検討

米国、英国、豪州、カナダにおける戦時日本語言語官がどのように動員され、訓練されたかについて、４カ国で収集した一次資料や関連する二次資料に基づき、情報を整理し、比較、分析した。結果、４カ国の中で日本語言語官養成プログラムの開始時期や規模、また訓練方法に差異があった要因として、戦前における語学将校養成や大学での日本語教育の経験、日系人コミュニティの有無、国内の政治状況を提示した。また、こうした戦時プログラムが戦後の米国、英国、豪州における日本研究発展の礎になったこと、日系二世など継承語話者の複雑な位置などについても論じた。これらの研究成果は、招待講演や学会発表で発信したほか、単著『太平洋戦争 日本語諜報戦』にまとめて刊行した。

(3) 学問領域、国境を超えた研究成果の発信

上記のような研究成果の発信については、歴史、国際刑事法、国際関係論などを専門とする研究協力者と国際的な連携をしたこともあり、翻訳通訳学という学問領域を超え、また、日本国内外のさまざまな地域で、日本語および英語を使用して実行することができた。翻訳通訳学以外の

学問領域では、メモリー・スタディーズ、アジア研究、歴史研究、メディア・スタディーズ、国際関係、日系移民研究、国際刑事法、カルチュラル・スタディーズ、軍事研究、諜報研究などの研究者が集う学会や講演会で研究発表をした。2020 年 3 月のアジア研究協会（AAS）年次大会は新型コロナウィルス状況で中止となり、実際の発表には至らなかったが、研究代表者が座長を務めた戦時通訳研究に関するパネルがトランスナショナルな東アジア研究を奨励する F. Hilary Conroy 賞を受賞したことは今後の研究を進める上で励みとなった。地域的には、日本のほか、台湾、香港、豪州、米国、カナダ、英国、アイルランド、オランダ、ドイツ、南アフリカで招待講演や学会発表を行った。また、英語の共著書および日本語の単著を刊行した。こうした越境的な活動を通して受けた多様な視点からのフィードバックを参考にしながら、本研究の集大成である下記の単著書の執筆に取り組んだ。

(４) 単著『Interpreters and War Crimes』の刊行（予定）

本研究の集大成となる単著『Interpreters and War Crimes』（通訳者と戦争犯罪）が 2021 年にラウトレッジ社（Routledge）から刊行される予定である。２部構成となっており、第１部は英軍による対日戦犯裁判で被告人あるいは検察側証人となった戦時通訳者の背景、動員の状況、罪状、抗弁、判決などを記述し、歴史・政治・社会的コンテクストに照らして分析する。第２部は、第１部で浮き彫りにされた通訳者の「可視性」、訳出内容の「遂行性」、聞き手から見た通訳者の「幻想主体性」、戦争犯罪における通訳者の共同責任といった課題を検討しながら、戦争や紛争における通訳者の役割、倫理、責任、保護について論じる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Cheah, W. L.	４．巻 17
２．論文標題 Culture-specific Evidence before Internationalized Criminal Courts: Lessons from Asian Jurisdictions	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of International Criminal Justice	６．最初と最後の頁 1031-1055
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Trefalt, Beatrice	４．巻 53
２．論文標題 The Battle of Saipan in Japanese Civilian Memoirs: Non-combatants, Soldiers and the Complexities of Surrender	５．発行年 2018年
３．雑誌名 The Journal of Pacific History	６．最初と最後の頁 252-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00223344.2018.1491300	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Cheah, W. L., Moritz, Vormbaum	４．巻 31
２．論文標題 British War Crimes Trials in Europe and Asia, 1945-1949: A Comparative Study	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Leiden Journal of International Law	６．最初と最後の頁 669-692
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0922156518000262	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Totani, Yuma	４．巻 3
２．論文標題 Guadalcanal Revisited	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Hoover Digest	６．最初と最後の頁 110-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Trefalt, Beatrice	4．巻 61
2．論文標題 Collecting Bones: Japanese Missions for the Repatriation of War Remains and the Unfinished Business of the Asia- Pacific War	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Australian Humanities Review	6．最初と最後の頁 145-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　12件／うち国際学会　19件）

1．発表者名 武田珂代子
2．発表標題 Language training in crises: Lessons from the Pacific War?
3．学会等名 The CCTS Lecture at Dublin City University（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 武田珂代子
2．発表標題 Training of Japanese linguists for Allied military intelligence during the Pacific War
3．学会等名 ICAS (International Convention of Asian Scholars) 11（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 武田珂代子
2．発表標題 Protecting interpreters from being “concerned in” war crimes?
3．学会等名 EST (European Society for Translation Studies) Conference（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Trust and joint responsibility: Japanese programs in Australia during the Pacific War and interpreters convicted as war criminals in postwar trials against the Japanese
３．学会等名 Public Lecture at University of Melbourne（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Interpreters’ visibility and joint responsibility in war crimes
３．学会等名 Center for Translation Studies Research Events at University College London（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Rewriting war memory through translation: Japanese-South Korean relations
３．学会等名 The 16th International Conference on Korean Language, Literature, and Culture（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Trial and error in the interpreting and translation procedures during the Tokyo Trial
３．学会等名 70 Years Later: The International Tribunal for the Far East（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Interpreters and war crimes
３．学会等名 MIIS Public Lecture Series（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 From Cambridge classicists to Japanese code breakers: How the British recruited and trained Japanese linguists for military intelligence
３．学会等名 Wolfson Lunchtime Seminars（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Mediating communication for the occupying foreign military in postwar Japan: Status and stigma
３．学会等名 Passing, Posing, Persuading: Cultural Production and Coloniality in Modern Japan（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Language cramming for crown and country: Wartime Japanese programs in Britain and their legacy
３．学会等名 The CEISR (Centre for European and International Studies Research) Seminar（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 The role of Nisei translators and bilingual journalists in national news agencies in wartime Japan
３．学会等名 APFTIS (Asia-Pacific Forum on Translation and Intercultural Studies) 7（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Strategic use of translation in the representation of colonial and wartime memories by the Japanese government
３．学会等名 A crisis in ‘coming to terms with the past’? At the crossroads of translation and memory（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Microcosm of wartime interpreters found in war crimes trials documents
３．学会等名 The Translator Made Corporeal: Translation History and the Archive at the British Library（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Collaborative research for the history of interpreting
３．学会等名 台湾翻訳通訳学会大会（台北）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Is interpreting torture a war crime?
３．学会等名 FIT Congress 2017 (Brisbane, Australia)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Nisei linguists across the Pacific and the Atlantic during World War II
３．学会等名 The First Japanese Diaspora Workshop at the Hoover Institution（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Method in translation and interpreting history
３．学会等名 Graduate Seminar at Chinese University of Hong Kong（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 Various faces of interpreters at the British war crimes trials against the Japanese in Hong Kong
３．学会等名 The Yau Shing-yen Lecture in Translation at Chinese University of Hong Kong（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 武田珂代子
２．発表標題 情報活動における言語官の養成 ：第二次世界大戦の事例から
３．学会等名 陸上自衛隊情報学校語学セミナー（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計9件

１．著者名 Sawyer, D.B., Austermuhl, F., Enriquez Raido, V., Takeda, K., Yamada, M., Torres-Simon, E., Pym, A., Gambier, Y., Schaeffner, C., Meylaerts, R., Metzger, M., Cagle, K., Hunt, D., Poechhacker, F., Mikkelson, H., Slay, A., Szasz, P., Cole, B., Sayaheen, B.	４．発行年 2019年
２．出版社 John Benjamins	５．総ページ数 430 (53-73)
３．書名 The Evolving Curriculum in Interpreter and Translator Education ("TI Literacy for General Undergraduate Education" (Takeda, K. & Yamada, M.))	

１．著者名 Forsdick, C., Mark, J., Spisiakova, E., Takeda, K., Cercel, C., David, L., Salt, K., Subotic, J., Sawkins, I., Neuhauser, S., Schneider, N., Crenzel, E., McKay, D., Steele, B., Noussis, G., Gordon, M., Arens, S., Vaisman, N.	４．発行年 2020年
２．出版社 Liverpool University Press	５．総ページ数 -
３．書名 The Crisis in Coming to Terms with the Past ("Rewriting War Memory through Translation" (Takeda, K.))	

１．著者名 Dittrich, V., von Lingen, K., Makraiova, J., Osten, P., Totani, Y., Aksenova, M., Amann, D. M., Cohen, D., Crowe, D., Ferencz, D., Morris, N., Orentilicher, D., Ozaki, K., Safferling, C., Seraphim, F., Simpson, G., Takeda, K., Trefalt, B., Wilson, S.	４．発行年 2020年
２．出版社 Torkel Opsahl Academic EPublisher (TOAEP)	５．総ページ数 -
３．書名 70 Years On: The International Military Tribunal for the Far East ("Trial and Error in the Interpreting System and Procedures at the Tokyo Trial" (Takeda, K.))	

1．著者名 武田　珂代子	4．発行年 2018年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 240
3．書名 太平洋戦争　日本語諜報戦	

1．著者名 D. Abend-David, K. Takeda, E. Heller, Ying Xiao, C. Bucaria, D. Chiaro, I. Mazur, Z. Pettit, Ying Cui, Yanil Zhao	4．発行年 2019年
2．出版社 Bloomsbury	5．総ページ数 245 (46-67)
3．書名 Representing Translation: The Representation of Translation and Translators in Contemporary Media ("Mediating Violence: Three Film Portrayals of Interpreters' Dilemmas as Participants in Conflict" (Takeda, K.))	

1．著者名 デイヴィッド・コーエン、戸谷　由麻	4．発行年 2018年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 288
3．書名 東京裁判「神話」の解体	

1．著者名 D. Cohen, Y. Totani	4．発行年 2018年
2．出版社 University of Cambridge Press	5．総ページ数 543
3．書名 The Tokyo War Crimes Tribunal	

１．著者名 武田珂代子	４．発行年 2017年
２．出版社 みすず書房	５．総ページ数 238
３．書名 東京裁判における通訳（新装版）	

１．著者名 Wilson, S., Cribb, R., Trefalt, B., and Aszkielowicz, D.	４．発行年 2017年
２．出版社 Columbia University Press	５．総ページ数 417
３．書名 Japanese War Criminals	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Selected Works of Kayoko Takeda
https://works.bepress.com/kayoko_takeda/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考